

ジョイスの時代のダブリン(6)

YUKI, Hideo / 結城, 英雄

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

57

(開始ページ / Start Page)

33

(終了ページ / End Page)

45

(発行年 / Year)

2008-10-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003558>

ジョイスの時代のダブリン(6)

結 城 英 雄

医療・公衆衛生・福祉

ブルーム一家の悲劇

医療もブルーム一家の生活と密接な関わりがある。ブルームは身長167センチ(17.86)、体重71キロ(17.91)の立派な体をしているが、「二週間と三日前」(17.1448-9)にはハチに刺されて慈悲の聖母病院で手当てを受け、本日も便秘気味で緩下剤の「カスカラ・サグラダ」(4.510)を服用しようかと思っている。同じくモリーも推定するところ、体重91キロ、身長155センチという立派な体にもかかわらず、あるいはそのような肥満体のためと言うべきか、腹にはガスがたまり、生理も不順のようだ。

子供の心配もあった。ミリーが誕生した折には産婆のミセス・ソーントンの世話になり、また幼少の頃には「はしか」で気遣い(6.123)、長じては「成長痛」(13.1202)に驚かされている。そもそも、息子ルーディにいたっては、長男ということもあり、多大な期待を抱きながら、生後わずか11日目で亡くしてしまった。医療の手の及ぶところではなかったらしいが、彼の死がその後のブルーム一家に麻痺的な暗い陰を投げかけていることは否めない。ブルームはいまだルーディの死に憑かれながら、「息子がいない。ルーディ。今ではもう遅すぎる[……]。おれも、すぐ年寄りになる」(11.1067)と悲壮感を募らせ、モリーも「あの子があたしたちの家で出た最しよの死人あれいらいあたしたちはすっかりちがってしまつて」(18.1450)とつぶやいている。もしルーディの悲劇がなかったら、ブルーム一家も今とはかなり違った生活を送っていたかもしれない。

もっとも、ブルーム一家の麻痺は特別なものではない。ブルームはオコネル通りを会葬馬車で過ぎる折に目撃した、墓場へと向かう子供の棺をのちほど回想して、プロスペクト墓地だけでも「葬式が毎日二十や三十はあるはずだ」(6.512)と述べている。彼のこの印象が個人的なものでないことは、「私はいままでに霊柩車や棺や会葬馬車がこれほど目につく都市を訪れたことはない」といった旅行者の発言、あるいは「そうした光景はダブリンの名物なのです」という地元の人の証言でも明らかである(Pearl)。ダブリンの死亡率は、毎年1,000人につき34人と他の都市よりも高く、しかもその20パーセントが一歳以下の幼児であった。埋葬は日常化し、会葬馬車がオコネル通りを頻繁に行き来していた。

死亡率、特に幼児死亡率が高い最大の原因は貧困であった。ブルームは、朝方サー・ロジャーソン河岸の近くで残飯あさりの少年を目撃し(5.5)、貧しい生活に同情する。さらに午後一時ごろ、ウェストモ

アランド通りで知人のミセス・ブリーンと立ち話をしながら、近くにたたずむ一人の裸足の浮浪児に目をとめ (8.235)、慈善の食事のことを考える。労働者階級がジョイスの作品でテーマとされることはないが、当時、ダブリンの貧困は驚くべき状況であった。乞食や失業者が街にあふれていた。残飯あさりの少年や裸足の少年はその象徴的な存在で、古い写真でよく見かける。ブルームがスティーヴンの妹を見ながら、「かわいそうにあの子の服はぼろぼろじゃないか。栄養も悪そうだし」(8.41) とつぶやいているように、中流の下層の人々でさえやつの暮らしであった。

すでに述べたように、ダブリンの人口の約三割が未熟練工、行商人、使い走り、サンドイッチマンなどの日雇い労働者であった。そうした家庭の平均の週給は 15 シリング以下（ミリーは 12 シリングであるが、大学出のスティーヴンでさえ 15 シリングである）で、家賃と食事で消えてしまう。子供も靴紐、マッチ、花、新聞などを売り歩いた。物乞いをしたり、さらには売春する女性もいた。時とすると、そうした収入がない場合もあるし、父親の酒代に消えることもある。こうした粗末な食事と劣悪な住宅という彼らの生活様式こそ、ダブリンの病気の温床であった。

ブルームの家庭はそれほど貧しいわけでもないが、死という現実問題においては、労働者階級の人々と変わらない。そしてルーディにまつわるブルーム一家の麻痺も、ダブリンの貧困と間接的につながりがあるかもしれない。本稿では、ひとまず医療、公衆衛生、福祉という側面からダブリンの身体的な麻痺を考察したい。

病院

まず医療について言えば、ダブリン市の人口約 30 万人に対して、医師と看護婦はそれぞれ 374 人と 1,018 人いた。病院は 11 あった総合病院の他、熱病病院、産婦人科病院、小児科病院、眼科病院、皮膚病病院、咽喉科病院、歯科病院、不治の病病院、性病病院、精神病院などの専門病院もあった (Thom)。恵まれた都市と思われる。

『ユリシーズ』では、リッチモンド精神病院、慈悲の聖母病院、臨終を迎える者たちの聖母ホスピス病院、マーサー病院、国立産婦人科病院、ジャーヴィス病院、神の聖ヨハネ病院、ウェストモアランド国立性病病院、キルメイナム病院、シンプソン病院などへの言及がある。また『若い芸術家の肖像』では、フェアヴェューのスティーヴンの家の前に聖ヴィンセント精神病院があるし、スティーヴンとリンチが散歩の際に通る道にはパトリック・ダン卿病院がある。そして『ダブリンの市民』では、ミセス・シニコーの検死をする施設として、ダブリン市病院（「痛ましい事件」）が挙げられている。

この数の多さは誉められるべきであるが、病院は今日私たちが連想するものとは異なる。病院名からわかるように、そのほとんどが篤志家により、十八世紀中ごろから十九世紀中ごろにかけて設立され、その後、プロテスタントの人々やカトリックの各種修道院により、慈善事業として運営されていた。掃除のために休業するとか、食事を運ぶリフトで患者の衣類を運搬するため不衛生であるとか、監禁施設のようにであるとかいった苦情にくわえ、いくつか根本的な問題もあった。

問題の一つは運営基金の不足であった。篤志家による献金、政府からの助成金、プロテスタントの日

曜日寄付金などの他、慈善市なども基金調達的手段となっていた。たとえば、マイラス慈善市はマーサー病院のために、1904年5月31日から6月4日まで開催（『ユリシーズ』では6月16日に改変されている）された。クレール射撃、ゴルフコンペ、クローケー・トーナメントなどに混じり、日本人力士との対戦、自動車の試乗、映画、寸劇などの挙行、あるいはセントバーナード犬のマッチ販売、芸人の余興、昼食会などが催された。54,565人の参加を集め、約4,400ポンドの収益があったと言われる。規模においては、十年前（1894年5月14日から19日まで）開催された、ジャーヴィス病院の慈善市のアラビー（「アラビー」）に匹敵する。1742年のヘンデルの『メサイア』初演も、マーサー病院の慈善事業のためであった（Lyons）。

次に施設の不備もあった。病院の数が多かったにもかかわらず、収容施設もほとんどなく、伝染病が発生するとたちまちパニックになった。1899年にははしかで650人亡くなり、1903年に天然痘が流行した際には救貧院まで利用せざるを得なかった。ちなみに、マーサー病院は慈善市のおかげで、手術室と麻酔室をそれぞれ一つ付加し、X線科を新たに開設し、看護婦の寝室を四部屋増設している（Lyons）。

宗教的な問題もあった。ほとんどの病院が宗派に関わりなく患者を受け入れていたが、それでもプロテスタント、カトリック、長老派といった宗派という「病気」を抱えていた。ロータング産科病院やクーム産科病院はプロテスタントの人のための病院であり、国立産婦人科病院はカトリックの人のための病院であった。国立産婦人科病院はメソジスト教徒であるミセス・ピュアフォイを受け入れているが、この病院は彼女自身にとり異教の場所であったろう。手術の方法が異なるだけでなく、生命に対するとらえ方も異なっていた（Somerville-Large）。

さらに、病院は何よりも医者就職先としての意味があった。病院の設立は患者のためというより、医者を収容するためのものであった。病院経営も麻痺的であった。

国立産婦人科病院

病院の中でも特に注目されているのが、国立産婦人科病院であった。この病院が第十四挿話の舞台とされているのは、医学のうちでも生命の誕生という、最も根源的な問題と関わっているからであろう。その主題は、「一国民の栄映を外見の光華によつて量度せんと欲する者は他の諸条件悉く等しき場合に於ては繁殖の継続に対する配慮の証しいかばかり進歩発展しありやを料計するを以て最も明快なる方途となす」（14.12）、と冒頭近くで述べられている。

国立産婦人科病院は、1883年に南ダブリン産科病院として設立された後、1893年に資金難で一時閉鎖、1894年にダブリン大司教などからの助成金を得てカトリックの産科病院として再開され、1903年に国王の勅許を得て国立産科病院となった。ダブリンの産科病院としてはロータング産科病院（1745年設立でベッド数90）とクーム産科病院（1867年設立でベッド数65）に次いで三番目にあたる。この病院は、「この舎の主をA・ホーンと謂う。七十の寝台設け備へ、毎に産む時に臨りし女を宿らせ [……]」（14.74-5）と記述されている通り、医師と看護婦が各3名、ベッド数が69であった。1903年には1,500人の出産の世話をし、診療室で4,000人の診察をしたという（Thom）。ダブリンでの出生者数は毎年約

10,000 人であるから、他の二つの病院での分娩を合わせると、かなりの妊婦が産婦人科病院の世話を受けていることになる。

多少の補足をしておこななら、1903 年に国立産婦人科病院で 1,500 人の出産が行なわれたわけではない。その大部分は病院からの医師や産婆の派遣と理解するべきである。今日とは異なり、出産は病院よりも家庭でなされるのが普通であった。ブルームの家ではミリーもルーディも、産婆のミセス・ソートン (4.417) の世話になっている。出産による死亡率も高かったが、産婆や医師を家に呼ばずむことである。国立産科病院設立の目的は、(1) 部屋の狭い貧しい家庭の妊婦に産後の安楽な場所を無料で提供し、(2) これから自立する若い医学生や産婆に研修の機会を与えることにあった (Farmer)。ミセス・ピュアフォイの入院は難産であると同時に、「うちには子供がいっぱいいる」(8.284) ためであり、病院に多数群がっている医学生は研修を目的にしていた。

それにしても皮肉なのは、難産で苦しむミセス・ピュアフォイと医学生たちの談笑の好対照である。マリガンのモデルであるゴーガティによると、病院 (hospital) の語源は歓待 (hospitality) であるらしく、7 人で 140 本のビールを空にしたという。学生たちの淫らな生命論議に暗示されているように、病院は患者よりはむしろ医者たちを「歓待」する施設であったらしい。

医 者

それでも、アイルランドでは早くも十五世紀ころから医学に力を入れ、オシール一族、オヒッキー一族、オリ一族といった有名な世襲の家系 (14.36) が輩出し、その後も十八世紀以降、目覚ましい発展を遂げた。たとえば、サー・フィリップ・クランプトン (1777-1858) はヨーロッパ中で知られ、ダブリン市内のグレイト・ブランズウィック通りに像が建立されていた (6.191)。また赤貧の農民の身でありながら、独学で勉強し、ついに医者になったジェイムズ・マリンス (1864-1920) などいた (16.1022)。作家オスカー・ワイルドの父親も有名な外科医であった。そして同時代には国立産婦人科病院院長アンドルー・ホーン (8.282)、市の死体検視官ルイス・A・バーン (6.885)、市の公衆衛生長官サー・チャールズ・キャメロン (10.538)、王立外科大学特別研究員・聖ヴィンセント病院外科医のジョン・S・マカードル (8.514)、作家ブラム・ストーカーの兄である外科医サー・ソーンリー・ストーカー (15.1030)、ジョージ・シガーソン (9.309)、オースティン・メルドン (14.729) などが活躍していた。

医者になるには医学校を卒業しなければならない。その一つはトリニティ・コレッジの医学部で、マリガンもその学生である。またスティーヴンズ・グリーン西通り 123 番地には、王立外科医学校があった。レネハンがコーリーとの待ち合わせを気にしながら時計を見上げるのは、その入口の時計である (「二人の伊達男」)。さらにキルデア通り 6 番地の一角に位置する王立内科医学校もあった。そしてスティーヴンの通ったユニヴァーシティ・コレッジも、セシリ通りに医学部を持っていた。

現在と同様、医学を取めるにはそれなりの研鑽が必要であった。1886 年の医学法改正により、医学部の修業年限は五年とされた。その間に物理、化学、生物学、つまりスティーヴンの言う「P・C・N」(3.176)、さらに解剖学、生理学、薬学、病理学、治療学、内科、外科、産科学、種痘、法医学、衛生学、

精神病などの学科を収め、三ヶ月の産科の実習と一年の臨床経験を積み、「内科、外科、産科」の最終試験にパスしなければならなかった。それどころか、ユニヴァーシティ・コレッジでは、一般教養としてさらに一年の学習が必要とされた。

医者は収入も安定し、需要も多く、社会的地位の高い職業であった。スティーヴンは医学生のマリガンに尊敬の眼差しを向けるミルク売りの老婆を軽蔑しながらも、心穏やかならずか、「彼女は大声で語る声に老いた頭をさげる [……] ほくなどを軽く見ている」(1.418-9) とつぶやいている。彼が国立図書館の入口で、医者の収入をめぐる同級生たちの雑談を平然と聞き流していたのは一年半前のことであった(『若い芸術家の肖像』)。方向の定まらぬ現在、卑屈にならざるを得ないのだろう。ユニヴァーシティ・コレッジを卒業した後、ジョイスも同大学の医学部、さらにソルボンヌ大学の医学部への進学を試みた。友人に倣い、経済的な安定を期待したからだ。

女性の入学も認められた。そのうちでも早いのが内科医学校で、1877年に5名の卒業生を送り出した。その後の受け入れは、外科医学校が1885年、ユニヴァーシティ・コレッジが1896年、トリニティ・コレッジは1904年以降という順である。特にユニヴァーシティ・コレッジの場合、1896年にフランシス・シンクレアの受け入れを決定すると、同年、トリニティ・コレッジの前学長の娘や、イースター蜂起の際に医療班で活躍するキャスリーン・リンなど、さらに五名が入学した。カトリック系の大学でありながら、プロテスタントの女性の入学が多かった。カトリックの司祭たちが女性の本分は家庭にあると考え、同派の女性が職業を持つことに異を唱えていたからである。

医者は病院で働くこともあったが、独立する人も多かった。個人経営者としてはモリーが「おりもの」で世話になった、高級住宅地ペンブルック道路六五番地の産婦人科医、J. M. コリンズ博士のような人もいたことだろう(18.653)。収入のある人はそうした専門医に診てもらった。逆に、スティーヴンの母親の最期を看取ったのは、ロバートJ. D. ケニー医師(9.826)である。この人物は北ダブリン救貧院所属で、スティーヴンの家庭では個人の医者と呼ばず、慈善の奉仕を受けたことになる。

医学／薬

当時は医療が進展していく過渡期にあたる。ジェイムズ・シンプソンが麻酔薬を開発したのは十九世紀半ばで、早くも1853年にヴィクトリア女王が第七子出産に際して無痛分娩を試み(第八挿話)、ブルームやモリーにとっても「クロロフォルム」という言葉は馴染みがある(5.481/18.1172)。その後も、レイ・パスツール(15.1849)の細菌の発見、ジョーゼフ・リスターの消毒薬の使用、ナイチンゲールの看護革命など目覚しかった。そしてレントゲンがX線を発見したのは1895年のことで、骨折や体内異物の発見に使用され、ブルームはその応用を考えている(8.1030)。結核や梅毒はこれからの問題であったが、天然痘の恐怖など遙か昔の話である。ブルームは、ベルファストで天然痘が発生したため、その地へ演奏会に出かける妻を気遣いながら、「彼女は種痘のやり直しをいやがるだろう」(5.189) とつぶやいているが、種痘(15.4032)の接種は十九世紀前半に実施されていたのである。

医学の進歩と相俟って医薬品も開発された。ブルームは整腸剤の「奇蹟の新薬」(17.1819)をロンドン

から取り寄せたこともあるし、今朝も便秘薬「カスカラ・サグラダ」(4.510)の服用を考える。ブルームが海岸で心惹かれる娘ガーティは、おりものや女性特有の疲労感のために「ウイドウ・ウェルチの婦人丸薬」(13.85)より「鉄剤カプセル」(13.84)を愛用し、さらにビーチャム社の「クリーム女王」(13.90)を皮膚の手入りに使用している。あるいは飲酒で赤鼻にならないための薬、『週間ピアソン』で広告されている「酒癖矯正の粉薬」(13.291)、ブルームの父親が自殺するために服用した「トリカプト」(17.624)、胆汁質の人のための「癩癩丸」(「痛ましい事件」)、モリーが肌の美しさを保つために調合してもらう「オレンジフラワー・ウォーター」、ミス・ドゥースが日焼けに薦められる「チェリー・ローレル水」(11.116)などがあった。

食事療法もあった。病人のためには古くから「ビーフ・ティー」などもよく用いられた(「姉妹」や「恩寵」)が、ブルームは「ベーコン、塩鱈およびバターにおける蛋白質とカロリー量それぞれのパーセンテージに関し、最後のものは前者が欠乏し、最初のものには後者が豊富である」(17.249-51)と科学的な思考をめぐらしている。彼はまたアルコールについても、「滋養剤として造血剤としてまた緩下剤としての効果」(16.91-2)があると主張している。栄養についての意識も高まってきていた。

薬局も医学的な知識を持つ薬剤師を抱えていた。ブルームはスウィニー薬局に立ち寄り、「甘扁桃油と安息香[……]それからオレンジフラワー・ウォーター」(5.490)と、モリーの化粧水の処方依頼する。そしてブルームの父親もアイルランド西部エニスのフランシス・デヒニー薬局で、アコナイト塗剤とクロロフォルム塗剤を調合した「神経痛用塗剤」(17.624)を購入している。スティーヴンの弟も薬局で働いている(Lyons)。

その一方、迷信も存在していた。ブルームが耳にした「ガスで百日咳が治る」(6.121)といった、風聞などもその一つである。また民族主義者の「市民」と自称する人物も、イギリス人を非難しながら、「あいつらは何百エイカーの沼と湿地のせいでおれたちみんなが肺病にかかって死にそうなのに、バロー川とシャノン川の川床を掘り深めようとしやがらねえ」(12.1256)と喚んでいる。さらにスティーヴンが思い描く「プラムの寓話」の老婆の一人は、腰痛の治療薬として「ルルドの聖水」(7.949)をなすりこんでいる。妻が霊に憑かれたとして殴殺した夫の話(1895年)も記憶に新しい。やはり医学の転換期にあったのだろう。近代医学と前近代の混在する時代でもあった。

公衆衛生

しかし、たとえ医学が進歩しても、病気の源が取り除かれなければ本質的な解決にはならない。住宅事情の改善、衛生についての理解、伝染病に対する配慮などと同時に、そのような仕事に従事する専門の委員会の設立が不可欠である。ダブリン市で公衆衛生委員会が発足したのは1866年、コレラが猛威をふるっている最中のことであった。上水道、下水道、住宅事情、屠殺場や酪農場や店などの検査、公衆浴場、ゴミ処理、伝染病など市の公衆衛生全般に取り組んでいる。健康医学技官のキャメロン(10.538)を長として多くの委員で構成されていた。

1900年当時、ダブリンで特に問題があったのは共同住宅で、人口過密、荒廃、不潔、通風不良といっ

たことが指摘された。下水溝の不良、住宅街での家畜の屠殺、廃棄物の投棄、リフィ川の汚染なども懸案事項であった。ダブリンの公衆衛生はイギリスの都市の中でも最低に位置していたのである。そんな中でも公衆衛生委員会はそれなりの成果をあげたが、それでも下層階級の人々の貧困と衛生概念についての無知、また基金に対する上流階級の人々の無理解に悩まされた。

そもそも、市内中央を流れるリフィ川は、汚水の溜り場として悪臭を放っていたというか、文字通り覆いのない下水道であった。兩岸地区の家庭から排泄物が放出されていたのである。「ポドル川が [……] 汚水の舌を出していた」(10.1196) という描写はそのことを物語っている。そのため、ロイヤル運河と大運河に囲まれたダブリンの地形が、尻に見立てられたこともある。実際、ブルームは、オコネル橋からリフィ川を見下ろしながら、投身自殺しようとしたルーベン・Jの息子のことを想起し、「あの汚水を腹いっぱい飲んだらうな」(8.52) と独白している。確実に死のうと思って毒を飲んだ上でリフィ川に投身した人も、汚水のために毒を吐き出し、一命をとりとめたという話もある。

それだけではない。リフィ川の排泄物は周囲の海岸をも汚染する。そのためか、近くの海岸で取れた貝を食べ、肝炎などで死亡することがよくあった。ブルームはサンディマウントの海岸にたたずみ、「オコナーなんて気の毒だよ、妻と子供五人がこの浜のムラサキ貝にあたって死んで」(13.1232) と独白している。またステイーヴンも、同じ海岸を歩きながら、「きたならしい干潟が、踏みしめる靴底を吸いこもうと待ちかまえている。汚水の吐息を吹き上げながら」(3.150) とつぶやいている。

また満潮時などには、汚水が排水溝を逆流して、下水道に汚れがたまり、伝染病の温床となっていた。下水にはガスが充満し、家庭の空気を汚染して人々の健康を害し、病気を誘発していたのである。ガティが便所に塩酸石灰をまく(3.353)のは衛生を考慮してのことである。ノージー・フリンがトム・ロッチフォードに「配水管の具合はどうだね？」(8.1000)と挨拶しているが、これは彼の下痢にダブリンの排水溝の不備をかけたシャレであると同時に、彼が排水溝のガスで倒れた人物を救出したことへの言及である(Adams)。

路上には馬糞も散乱していた。馬車がいまだ中心的な交通手段であったためである。清掃馬車による夜の撤去作業もあった(16.1771)が、それは限られた地域でのことであった。道路の舗装も不十分であったことも事態を悪化させていた。「通りには埃や馬の糞や肺病やみの痰が積もり重なっている始末だ」(1.414)とマリガンは語っている。ブルームがわざわざ葬式の前に風呂に入る理由の一つは、こうした道路事情による。それは、「風呂には行って来てよかった。足がじつに清潔な感じ」(6.105-6)という独白に明らかである。粉塵が飛び散り、蠅が群がっていた。蠅は腸チフスや赤痢を伝達する。鉄道馬車がすべて電化されてから十年後の1911年においてさえ蠅が異常発生し、市では蠅一袋に三ペンス支払うことを提案している(O'Brien)。蠅帳なども使用されていた(「姉妹」)。当時を回想し、車の登場により、幼児死亡率が低下したと言う人もいる(Somerville-Large)。

家畜も多かった。イギリスへ輸出される家畜、週平均15,000頭(牛は4,000頭)が、市内を移動(第六挿話)しながら脱糞した。そして11月から5月にかけては、市内で6,000頭の乳牛が家の裏庭で飼われ、膨大な糞を生み出していた。また屠畜場も私営のものが50以上もあり、その残骸が散乱し、悪臭を放っ

ていた。ブルームも、かつてジョーゼフ・カフの家畜市場で働いていたことがあり、その時の様子を「脳天をまっぶたつにする斧 [……] 肺臓がぶくぶく詰まっている屠畜用バケツ」(8.723) と回想している。

家畜との関連ではミルクも危険であった。ミルク売りの老婆を前に、マリガンはミルクの効用を語ってきかせる。古くから牛乳は栄養補給源であった。ブルームはハンロン牛乳店より配達されたミルクを猫に舐めさせている。またかつて彼が妻のためにアイルランド農場の製品を購入していたとの話も、まことしやかに語られている。ダブリンには酪農業や牛乳販売の仕事に携わっている人は 800 人以上いた。そして商店街には牛乳店があり、店の裏で飼育している牛からしぼったミルクを販売していた。だが低温殺菌されていないミルクが多くて、蠅の媒介により伝染病が広がっていたのである。

しらみを媒介にした発疹チフスも危険であった。シャルル・ニコル (1866-1936) が発疹チフスとしらみとの関係を究明したのは 1909 年のことで比較的新しいが、十九世紀末までにはほとんどの文明国では、衛生施設や住宅事情の向上に伴い、チフスの発生はかなたの歴史の記録となっていた。この病気がわずかながらでもダブリンで発生し続けていたとしたら、それはこの都市の衛生が遅れていたことを示す。ベルヴェディア・コレッジの作文の先生が授業中に股に手を入れ、ステイーヴンが大学生のころ住んでいたフェアビューの家でも質札を入れた箱にしらみの跡が残されている (『若い芸術家の肖像』)。彼の母親についての思い出の一つは「子供らのシャツのしらみをつぶした血で赤く染まった [……] 爪」(1.268) である。

そして最大の問題は共同住宅であった。市民の約三分の一の 20,000 世帯の人々が一部屋に住み、そのうちの 60 パーセント以上が 3 人以上の同居であったという。共同住宅は設備が不備な上に不潔で、病気の温床になっていた。貧困のために栄養失調の子供が多かっただけではなく、多数の人々が同居していたために、伝染病が発生すると多数の死者が出たのである。ジェイムズ・エシの小説『空腹——ダブリン物語』(1918)、あるいはジェイムズ・プランケットの『汚された都市』(1969) は、空腹にあえぐ当時のダブリンの貧困家庭を描いている。

そのような状況において、誉められるのは 1868 年に完成したヴァートリー水道である。これはダブリン南約 30 キロメートルのヴァートリー川の水を利用した水道で、「ウィックロー州にある立方容 24 億ガロンのラウンドウッド貯水池から [……]」(17.164) という具合にその経路が詳細に語られている。かつてフリーマンズ・ジャーナル社の社主であり、市会議員でもあったサー・ジョン・グレイ (6.258) により推進された。まさしく画期的な出来事であった。それまでダブリン市は、蛆のいる南北の二つの運河の汚い水を使用しており、水代わりにアルコールに頼る人もいた。

1906 年に完成する大下水道計画も画期的な出来事である。これはリフィ川に流入していた汚水をピジャン・ハウスの要塞跡に集め、濾過した後、ダブリン湾に放水する計画であった。「棟割長屋の前のむき出しの下水溝や掘り返した道路の盛土」(6.45) といった描写は、工事の進行中であったことを示している。この計画によりリフィ川南北の地区の水洗便所が一段と広がったが、これはその後の話である。

便所・ゴミ

したがって、家庭の便所もそれほど快適ではなかった。事実、ブルームの家でさえ室内便所はなく、屋外の便所を利用するか、モリーのように室内便器を使用していた。しかし室内便器を使用する場合には悪臭が部屋に立ちこめる。ブルームが就寝前に「高さ一インチの黒くて小さな円錐体」(17.1321)に火を点すのは香である。これで悪臭を和らげるが、翌日、香はすえたような臭いを残すらしい(4.315)。

廃物の処理も難題だった。モリーのように家庭で焼却することもできたが、市には500人の清掃夫がおり、160頭の馬を使い清掃を担当していた。主な仕事は市が配布した二万個の「ごみ入れ」(15.27)、路上の清掃、灰だめの人糞などの回収で、廃物はスタンリー通りの廃物焼却炉、クロンターフの泥地、フェアビューの埋立地で処理された他、一部は税関前に繋留されたゴミ処理船、「エブラナ号」(16.237)で夜毎に海へ捨てられた(O'Brien)。

結核／性病／精神病

こうしてダブリンは「百病の巣くう万魔殿」(14.1425)であった。喘息(10.1009)、貧血(4.433)、猩紅熱(6.124)、流行性インフルエンザ(6.125)、湿疹(5.6)、脳震盪(15.3312)、舞蹈病(15.15)、癌(15.4187)、腸チフス(12.1106)、胃炎(12.231)、心臓病(12.231)、黄疸(7.135)、扁桃腺炎(14.1425)、甲状腺腫(14.1426)、通風(13.321)、急性肺炎(16.1313)、天然痘(5.188)、座骨神経痛(15.2782)、痔(4.510)、靴職人の胸部疾患(15.954)、さらには梅毒(15.1543)などもある。

ジョイスは病気の特徴を鮮やかに描写している。たとえば、アル中の表情を取り上げても、「目はただれて桃いろの血管が浮き出している」(「下宿屋」)、「濃い葡萄酒いろの陰気な顔に[……]すこし出目で白目が濁っている」(「対応」)、「はれぼったい目蓋」(「死者たち」)などの描写にも明らかだ。またコークへ父親と旅したスティーヴンが店で咳払いしているが、これは手が震える父親のアル中を隠すための仕草を暗示している(『若い芸術家の肖像』)。そして「真っ赤な顔」(7.367)のマイルズ・クローフォード、あるいは「通風の両手」(11.452)をしたベン・ドラードがアル中であることも明らかだ。

なかでも致命的な病気は結核、特に肺結核で、死亡率の一位であった。グレタのゴールウェイの恋人が死亡したのも肺結核による(「死者たち」)。フリーマンズ・ジャーナル社で雄弁家の一人として引き合いに出されるJ. F. テイラー(7.793)も、ブルームの友人であったフィリップ・ギリガンやマイケル・ハート(17.1252-5)も、肺結核で亡くなっている。スティーヴンは家から出たところで肺結核を患っている男に出会い(『若い芸術家の肖像』)、将来を嘱望されていたJ. J. オモロイも結核を患っている。進行すると、顔に「消耗性の赤み」(7.293)が現われ、咳に伴う「薄紅いろの血」(15.996)を吐くといった症状を呈する。ダブリン市だけでも、肺結核で毎年1,300人が死亡していた。

コッホによる結核菌の発見は1882年のことであったが、予防薬BCGが発明されるまでには時間がかかった。肺結核は天然痘、チフス、コレラなど劇的な兆候が見られる流行病とは異なり、日常的な病気とされていた。それどころか、肺結核はアイルランド病とか女性的な病気と考えられ、隠すべき病気であると思われていた。それでも1899年には肺結核予防全国協会ができ、1907年にはアバディーン総督

夫人の女性全国健康協会が設立され、1908年には肺結核条令が採択された。隔離する施設のないなど対策も不十分であったが、肺結核が伝染病であることが知らされるようになり、通気や衛生の必要性が説かれた (Malcolm)。

性病も注目すべき病気であった。港や駐屯地に多い病気で、ダブリンはその二つの要因を持つ。マリガンがスティーヴンのことを「痴呆性全身麻痺」(1.128)に冒されているとからかうが、それは世紀末を指示する言葉であるとともに、「歩行性運動失調症」(15.2592)と同様、梅毒の末期症状の意である。性病対策の一環として、1866年から1886年にかけて「接触伝染病法令」(娼婦の検査)が施行されたが、これは軍隊のためのもので、ダブリンはロンドン同様、人口が多く適用外であった。娼婦の病気も放置され、性病で苦しむ者も多かった。

女性のための病院として、タウンゼンド通り 21 番地に無料のウェストモアランド国立性病病院があったが、監禁の施設でもあるかのような陰鬱な施設で人気がなかった。男子はスティーヴンズ病院その他で治療を受けていた。政府の助成金を除き、性病に対しては市民からの援助も得られなかった。パストゥール研究所のイリヤ・イリッチ・メチニコフが1904年に類人猿への梅毒の接種に成功した後(15.2590)、P・エールリッヒが梅毒の特効薬サンバルサンを発見するのは1910年のことであるし、淋病にも効力のあるペニシリンの開発は1940年代初頭まで待たねばならない。

性病についての統計は社会のほんの一部を示しているに過ぎない。一般の人々は沈黙を守り、宗教界は性病を天罰と非難した。1899年の猥褻広告法令により、梅毒や淋病に関する広告も禁止されていた。ブルームは、広告のことを考えながら、「あの藪医者の子淋病のは共同便所ごとに貼り出してあった。近ごろは見かけないな」(8.96-7)とつぶやいている。また医者たちも死亡原因を別名で公表することが多かった。性病で治療を受けた人は年500～600人で、これは全罹病者の1パーセントにも満たず、人口の10パーセントが性病に犯されていたとの推定もある。実際、梅毒の死者の実に70パーセントが子供であった。ブルームが梅毒を患っているなら、息子ルーディの死は先天性梅毒が原因であるだろう。性病は娼婦のみならず、伝染病のごとく家庭をも襲った。娼婦が大英帝国を滅ぼすとささやかれたが、ダブリンの市民の方が危険であった。

精神病も多かった。精神病も性病と同様、男女の関わりから生じる。性病が男女の不順な性的関係に基づくとすれば、精神病は男女の精神的交流の欠如に由来することが多い。人口の11パーセントが精神病で収監され、そのほとんどが女性であった。『ダブリンの市民』では男女の間にほとんど愛がない。愛の欠如と貧困が重なり、精神病が起ったと考えられよう。特に女性はストレスを内向させる傾向にあり、精神病を患いやすかったのではないだろうか。

またスティーヴンの母親は「癌」(15.4187)を患い、狂気のうちに亡くなった。当時、癌で死亡する人は約3,000人で、彼女もその一人に当たる。だが、たとえそうであるにせよ、その要因は多くの子供を出産し、栄養失調に苦しんだことにあるのではなかろうか。そしてまたイーヴリンの母親も「デレヴォーン・ゼローン」という言葉をつぶやきながら亡くなっている(「イーヴリン」)。彼女たちの狂気をつぶやきは「女性のエクリチュール」であるかもしれない。

福祉事業

政府も手をこまねいていたわけではない。福祉事業として1838年に救貧法が成立し、全国を130の行政区（連合）に分け、それぞれの地区の貧民の救済をこととする救済施設、救貧院が設立された。ダブリンにも、北ブランズウィック通りの北ダブリン連合教区救貧院、ならびにジェイムズ通りの南ダブリン連合教区救貧院ができた。それぞれ南北の地区の救貧活動として、院内救助（両院で約6,500人収容）と院外救助（週二回パンなどを配給）を行なった。

だが救貧院は問題の多い組織であった。まず家族全員が入ることが条件であるのに、家族がふえることを恐れてか、それぞれが離れて暮らす必要があった。また酒は言うにおよばず、トランプなどの娯楽さえ禁止されており、言行にも気をつける必要があった。さらに七歳以上の労働可能者は、昼一時間の休憩を除き、朝七時から夕六時まで、「まいはだ」作り、石砕きといった仕事をしなければならなかった。救貧院の主な目的は貧乏人の救済であるよりは、働かせることにあった。救貧院とは文字通り「働かせる家」(workhouse)であり、その前提には働かないから貧しいというベンサム功利主義思想があった。チャールズ・ディケンズは『オリヴァー・トゥスト』(1837-9)でイギリスの救貧院を非難し、同じくチャールズ・キッカムも『サリー・キャヴァナ』(1869)で院内でのアイルランド人親子の悲壮な別れを描いている。

組織の運営上、各教区には救貧委員が数人いて、貧しい人々の生活に気を配っていた。市の石番をするガムリーなども、そうした保護を受けている一人である(16.109)。本来の目的からして、委員の実際の役割は救うことより働かせることで、貧乏人の敵であった。1896年以降、その委員に女性も含まれることになり新しい時代が到来したが、それまでは権力を笠に着る委員が多かった。酒場経営者で市会に立候補するティアニーも、王立取引所地区の救貧委員の一人である（「蕙の日の委員会室」）。救貧活動は市民の税金で運営されているのである。

博愛家による個人的な事業としての慈善の組織もあった。アイルランドの福祉はそうした団体が支えていたと言える。救貧院でさえそれらの団体の支援を受けていたのである。慈善団体は、富裕な女性の私的な事業として始まりながら、十九世紀の中ごろまでには各種の修道院が引き継ぐ格好で存続した。それらの事業は、貧乏人、娼婦、犯罪者、孤児などの救済を目的として、施しや雇用の斡旋から、娼婦たちの収容施設の建設、さらには病院、感化院、授産学校の運営、あるいは囚人の世話など多岐にわたる。いずれもキリスト教の博愛の精神に基づく。

さらに下アビー通りのクリスチャン・ユニオン・ビルでは、日曜日には無料の朝食を与えていた。浮浪児を見ながら、「ナイフとフォークが鎖でテーブルにとりつけてある」(8.237)とブルームが独白しているように、施しを受ける人々は、食器を鎖でつないであるカウンターの前に立って食事をした。また救世軍による施しもあり、「一ペニーのロールパンで軍楽行進」(8.470)とやはりブルームが独白しているように、人々は一緒に行進することで施しを得られた。

親がいない浮浪児のためには授産学校もあった。ダブリン周辺には八つあり、ダブリンだけではなく、全国の孤児が集まっていた。その一つがアーティン授産学校で、クリスチャン・ブラザーズの人々の運

営により、約 800 名の少年が収容されていた。マーティン・カニンガムがコンミー神父にディグナムの遺児の一人を世話してもらおうとしているのは、その授産学校である。ディグナムの子供は孤児とは言えず、神父は知り合いのつてを頼ってそこに出かけて行く。慈善団体によるほろ学校として、エクルズ通り 46 番地の聖ブリジッド孤児院、ならびにマウントジョイ通り 61 番地の聖ヨセフ孤児院があった。それぞれ無料で、しかもパンや衣服を与えていた。

一方、ブルームがドーソン通りの書店の前で想起する「鳥の巣」(8.1072) は、プロテスタント系の施設である。プロテスタントの篤志家ミセス・スマイリーは孤児のための施設を数多く運営していた。タウンゼンド通りの「エリオット・ホーム」と同様、キングズタウンにあった鳥の巣もその一つで、1900 年当時、185 人の七歳以上の子供が世話を受けていた。ブルームはその組織が貧民の子供を食事につけて、プロテスタントに改宗させようとしたと非難がましいが、確かにカトリックの子弟であることはその施設に入る優先権条件であった。

また身を持ち崩した女性の施設もあった。「ランプ灯のダブリン」(「土」) はプロテスタントの経営する、そうした更正施設である。市内南部のボールズブリッジ 35 番地にあった。娼婦たちを更正させることが主たる目的で、運営資金は洗濯業により賄われていた。「各世帯主はこの施設の洗濯を利用することで施設の物質的援助がはかれる」と広告されていた。この施設に二年いると、職の斡旋をしてもらえただけで、アメリカへの移民も可能となった。もとの悪に戻る女性は一パーセントにもみたなかったそうである (Williams)。ブルームがミセス・グリーンにその書記をしていると嘘をつく「マグダラの家」(15.402) も同様の更正施設である。下グロスター通り 104 番地にはカトリック系の、また下リースン通り八番地にはプロテスタント系のマグダラの家がそれぞれあった。

慈善事業には人々の支援が必要である。ブルームたちの 1894 年のグレンクリー感化院の晩餐会への出席 (8.160) もその類である。それはウィックロー州のグレンクリー川沿いにあるセント・ケヴィン感化院である。ここはアイルランドの六つの感化院の一つで、ローマ・カトリックの男の子を収容していた。ブルームたちの晩餐会の費用の幾分かは運営資金にまわるであろう。

慈善事業は一般の人々の目を社会の現実に向けさせ、時とするとその現実の背後に存在する政治的・経済的な要因にも知見を広げる手助けになった。それは十九世紀のアイルランド人の意識の変革をも生み出したとも言われている。だが、問題が発生した後に対応策を講ずる限り、問題の再生産を許容するだけである (Luddy)。

ブルーム一家の麻痺

幸いなことにブルーム一家は、現在、福祉の世話を受けることもない。それは「養老保険証書、銀行預金通帳、株券所有証書」(17.1931) を所持しているためである。それぞれ 500 ポンド、18 ポンド 14 シリング 6 ペンス、900 ポンドで、合計 1,400 ポンド以上の資産になる。もしこれらの資産がなければ、彼ら一家も「貧困」、「寄生生活」、「生活無能者」、「最低の悲惨」(17.1936) という奴隷的境遇へと下降せざるをえないだろう。

その一方、一家の大黒柱を失い、保険金さえも高利貸しの抵当に入っているディグナムのような一家も身近にいる。いつ何時、同様の運命が訪れるかもしれない。またそのような悲惨な生活を強いられなくとも、ブルーム一家もダブリンの貧困と無縁ではないだろう。ルーディの死の原因も貧困によるかもしれない。病気は階級を越え伝染する。息子の死も「大自然の過失」(6.329)と済ませることはできない。

参考文献

- Adams, Robert Martin. *Surface and Symbol: The Consistency of James Joyce's "Ulysses."* New York: Oxford University Press, 1962.
- Burke, Helen. *The Royal Hospital of Donnybrook: A Heritage of Caring 1743-1993.* Dublin: The Royal Hospital Donnybrook, 1993.
- Cameron, Sir C. A. *Report upon the State of Public Health in the City of Dublin for the Year 1904.* Dublin: John Falconer, 1905.
- Esse, James. *Hunger: A Dublin Story.* Dublin: The Candle Press, 1918.
- Farmer, Tony. *Holles Street: The National Maternity Hospital 1894-1994.* Dublin: A & A Farmer, 1994.
- Finnane, Mark. *Insanity and Insane in Post-Famine Ireland.* London: Groom Helm, 1981.
- Gogarty, Oliver St John. *Tumbling in the Hay.* London: Constable 1939.
- Jones, Greta and Elizabeth Malcolm, eds., *Medicine, Disease and the State in Ireland, 1650-1940.* Cork: Cork University Press, 1999.
- Kickham, Charles. *Sally Cavanagh.* New York: Benziger, 1902.
- Luddy, Maria. *Women and Philanthropy in Nineteenth-Century Ireland.* Cambridge: Cambridge University Press, 1995.
- . *Women in Ireland, 1800-1918: a documentary history.* Cork: Cork University Press, 1995.
- Lyons, J. B. *James Joyce & Medicine.* Dublin: The Dolmen Press, 1973.
- . *The Quality of Mercer's: The Story of Mercer's Hospital, 1734-1991.* Dublin: Glendale, 1991.
- Meenan, F. O. C. *Cecilia Street: The Catholic School of Medicine 1855-1931.* Dublin: Gill and Macmillan, 1987.
- O'Brien, Joseph V. *"Dear Dirty Dublin": A City in Distress.* Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1982.
- Pearle, Cyril. *Dublin in Bloomtime: The City James Joyce Knew.* New York: The Viking Press, 1969.
- Plunket, James. *The Strumpet City.* London: Granada, 1969.
- Somerville-Large, Peter. *Dublin.* London: Hamish Hamilton, 1979.
- Williams, G. D., ed. *Dublin Charities: being a Handbook of Dublin Philanthropic Organizations and Charities.* Dublin: Falconer, 1902.
- Wilson, T. G. *Victorian Doctor: Being the Life of Sir William Wilde.* Yorkshire: EP Publishing, 1974.
- Special Report on Cancer in Ireland.* Dublin: Cahill & Company, 1903.
- 丹治愛『ドラキュラの世紀末——ヴィクトリア朝外国恐怖症の文化研究』東京大学出版会 1997